

相方積み

石を五角形や六角形に切って、互いにかみ合うように積み上げる技法。

東御廻り

門中単位で数年ごとに琉球開闢の神であるアマミキヨが住んだといわれる玉城、知念の聖地を中心に巡拝すること。巡る聖地の構成は門中ごとに決まっている。

アサギ

離れ座敷のこと。一般的には、一番座と雨端や縁でつながっている。アシャギとも言う。

字

中国で、男子が成年後に実名の他につけた名前。日本では、学者や文人が用いた。

網代文様

竹や葦などを斜めもしくは縦横に組んだ時に現れるパターンを模した文様。

雨端

民家主屋のおもに南、東面に差し出した庇。またはその下の部分。雨をさえぎったり、直射日光が家の中に入り込むのを防ぐ。

暗渠

排水のために地下に造った水路。

案文集

「口上覚」などの文章をまとめた文書。

遺構

遺跡の中に残されている建築物や工作物、土木構造物などの跡。

石厨子

遺骨を納める石製の棺。

イビヌメー

イビ(神域)の前。斎場御嶽には、大庫理・寄満、三庫理など6つのイビがある。

伊平屋の神女(アムガナシ)

伊平屋の最高神女で、三十三君のひとり。尚真王の姉・真世仁金が初代。第二尚氏発祥の地の神女として尊敬された。

鋳物師

鉄や青銅、鉛などの金属を溶かし、鋳型に流し込んで器物をつくる職人。

入母屋型

上部は切妻造で二方へ勾配するが、下部は寄棟造りになっており四方へ勾配を有する屋根の様式。切妻造(真屋)が後ろへ入り込んだという意味の「入り真屋」の転化とされる。

印籠蓋造

蓋と身が合わさる容器

内割り

像の内部をくり抜いて空洞にすること。寄木造りの木像は、大きく内割りされる。

掟

間切や村の行政責任者。

御殿殿内

一般的に、王族の家や建物のような、立派な邸宅を意味する。ほかに八重山頭職にあった宮良殿内や伊是名島の夫地頭職にあった銘苅殿内のように、地方の名家に対しても殿内の呼称を使う場合があった。

易占

筮竹や算木を用いて行う占い。

掖門

正門のわぎにある小さな門。

絵師主取

貝摺奉行所に配置された絵師を管理する役職。

江戸立ち

「江戸上り」ともいう。徳川将軍と琉球国王の代替わりに合わせて、将軍にあいさつするため、琉球国から使節一行が江戸に派遣されること。

御新下り

聞得大君の即位儀礼。現在の南城市にある「斎場御嶽」で夜籠りをして、聞得大君に就任する。

汪楫

1621年生～1689年没。尚貞王のときの冊封正使。『明史』の編纂に携わり、詩にもすぐれていた。

大阿母

ノロの上位にあつて所管地域の祭祀を取り仕切る地方女神官。宮古大阿母、八重山大阿母、泊大阿母等。

大合子

蓋のある容器の総称。身と蓋を合わせる容器。

大やくもい

首里王府時代の士族の称号である親雲上の古い名称。

沖縄戦

1945(昭和20)年3月の米軍の慶良間諸島上陸から同年9月の降伏調印式まで、沖縄島とその周辺で行われた日米両軍による戦争。住民が戦闘に巻き込まれ、甚大な被害を受けた。

奥書

書籍や記録などの末尾につけた由緒書。著作・筆写の年月日、筆者の氏名、来歴などを記している。奥付ともいう。

貝摺奉行所

王府で漆器などを製作する只摺師や絵師、その他の漆関係の職人が属する役所。

火焰宝珠

炎に包まれた形をした宝のたま。

郭

城の内外を土塁、石垣、堀などで区画した区域の名称で、曲輪とも書く。

隔日出勤

一口おきに仕事に出ること。首里王府の出勤体制は三司官以下の諸役人が3つの班に分かれる、三番出仕制という3交代制の隔日出勤になっていた。三番出仕制は、番日の全日出勤、半番の半日出勤を隔日出勤すること。番にあたって出仕することを『番登(バンヌブイ)』といった。

懸子

箱の中にはまるように造られた箱。

雅号

文人や学者、画家などが本名以外につけた名前。

頭職

首里王府時代の宮古・八重山における役人の最高職。

家制

家族の在り方を、法や慣習などの規範によって規定したもの。

型染め

染物の技法のひとつ。型紙を使って布に文様を染める技法。

褐釉陶器

酸化鉄を含む釉薬をかけて焼成した陶器。

狩野安信

江戸中期の狩野派の画家。
1614年生～1685年没。

家譜

近世期において、士族が持っていた家系に関する記録。系図。

被蓋造

身に蓋がおおいかぶさる造りの器。

亀甲墓

しまくとうばで「カーミナクー墓」という。亀の中羅のようになっている墓。中国の河南系の墓の影響を受けたもので、17世紀後半から造られ始めた。

茅葺き

植物の茅で葺いた屋根。

唐草風・唐草模様

織物・染物・蒔絵などで、つる草が絡み合う様子を描いた模様。

唐名

近世琉球の士族が有した中国名。「とーなー」ともいう。

伽藍

寺院の建築物の総称。

官位官職

人間の身分や首里王府における役職。

顔料

水や油に溶けない性質の、色を生み出す素材となるもの。鉱物を原料とする無機顔料と、植物などの生成物を原料とする有機顔料に大きく分けることができる。中国や日本の伝統的な絵画では、紙や布に顔料を接着するため、膠水に混ぜて使う。

翰林院侍講

中国の国史の編纂を行う官庁、翰林院の身分。正5品。

気形

動物全般を指す言葉。

間得大君

琉球国最高位の神女(女性司祭者)。名称は名高い偉大な君の意味。王の姉妹・王女・王姪・王妃らが即位した。

器財

器物や道具。うつわ。

儀仗兵・儀仗隊

皇帝や国王、大臣、高官、外国の賓客など身分の高い人につけられた兵隊、部隊。

寄進

社寺などに、金銭や物品などを寄付すること。

寄託

博物館や美術館などが、文化財や価値のある品物を、所有者から預かって保管すること。

球陽

王統・年月順に政治、天変地異、文化等に関する出来事を記録した琉球の正史。尚敬王代の1745年には完成したが、1876年まで追記が行われた。外巻に『遺老説伝』がある。

供出・金属供出

太平洋戦当時、武器生産に必要な金属類が不足したため、鉄道のレールをはじめ、金銀杯、銅鐘などの金属類が国や県によって回収され、戦争に利用された。

慶尚南道

(キョンサンナムド、けいしょうなんどう)
現在の^{大韓}大韓民国の東南部に位置する。

切石積み

石を切って加工して積む技法の総称。相方積みや布積みなど。

輝緑岩

火成岩のひとつ。玄武岩と同じ化学組成で、やや緑がかっているのが特徴。琉球で見られる輝緑岩は中国福建から輸入されたと考えられている。

琴棋書画

風流な人がたしなむ四つの芸(琴・碁・書・画)。

金象嵌

金属の銅や鉄などに文様や文字を刻み、そこに金をはめこむ彫金の技法。この技法で彫金を用いて施した文字を金象嵌文字という。

金泥

書画などを描く際に用いる顔料の一種。金粉と膠を混ぜ、水で溶いたもの。

楔

木材や金属でできたV字型の道具。木や石を割ったりする用途と、すき間に入っている物が離れないようにその中に打ち込み密着させる用途がある。

蔵元

宮古や八重山、久米島の仲里・具志川間切に設置された役所。

溪隠安潜

相国寺2世住持。琉球出身の五山文学者。琉球の鐘銘の多くを撰述している。

慶賀使

江戸幕府や中国へ派遣された使節。幕府で新将軍が就いた際や中国で新たに皇帝が即位した際に、その就任を祝う使節。

継室

後妻。

景泰丁丑年

1457年、尚泰久王4年。中国では、この年に年号が景泰から天順に変わっている。琉球では、中国で年号が変わったことが伝わらなかったのか、そのまま景泰の年号を使っている。

景德鎮

現在の中国江西省に所在する窯の一つで、宋代から青花を焼き始め、一大産地となった。

毛彫り

金工や漆工の技法で、毛髪のように細い線で模様や文字を彫ること。

乾坤

八卦の陰と陽。北西と南西、天と地のこと。また、2巻で一組となっている書物の上巻と下巻の意。

巻胎

漆器を作る技法で、材木を薄く長くテープ状に加工したものをうずまき状に巻いて押し出し、曲線をもつ形にしたもの。

号

学者や文人・画家などが、本名や字の他に使う名前。

検地

幕藩体制の基礎としての石高制を確立した土地調査。琉球国では、薩摩藩によって、1609～1611年にかけて、慶長検地が行われた。

麴屋

泡盛の麴を発酵させるための施設。

口上写

上の位の人に申し上げることを書いた書面の写し。

口上覚

記録を口頭ではなく、文書として残したもの。琉球国時代には、重要事項を伝達するのに口頭だけでなく文書にも書いて渡した、その控え(覚)を口上覚という。大和人との応対には、ことばが通じにくいのでよくこの方法をとった。薩摩の役所と琉球館のあいだでは、聞役が用件を聞いてきて、書役が書面でもって返答した。その口上覚を集めたのが琉球館文書である。口上覚を書く役目として附衆もいる。

豪農

金持ちの農家。

貢納布

琉球国時代における租税のひとつ。上布や芭蕉布などがあつた。

紅釉水柱

銅を発色剤に使用し高火度で焼成した陶磁器。銅紅釉、辰砂釉とも呼ばれる。還元焰焼成により鮮紅色に発色する。中国では宋代に始まったとされるが遺品は元代が初出である。景德鎮窯が主に宮廷御器を焼造し、明・清代を通じて官窯の特技として制作された。

勾欄

橋や社寺・廊下などの端の反り返った欄干。

国相

首里王府の役職名。摂政・王相または諸司代ともいった。王子や按司の中から任命された。王府の中での最高職。

五開鐘

三線の真壁型の名器。開鐘とは、夜明けにつく寺院の鐘のこと。夜明けの鐘の音は遠くまで響き渡るので、それにちなんで、18世紀中期以降に名づけられた。王府は、作者の真壁里主が製作した真壁型にのみ「〇〇開鐘」と固有名をつけ、王家や高級士族が大切にした。

御検使

問題が起きた際、王府が地方に派遣する使者。

護佐丸

?～1458年 琉球の歴史上名高い武将。唐名は「毛国鼎」。尚巴志の北山討伐に従軍して今帰仁城を攻略。その後、座喜味城を築城し、さらに中城城に移り、現在の三の郭を築いたと伝わる。名築城家といわれている。

腰壁

上部とは異なる材質の石を、腰くらいの高さまで張りつけ又は積んだ壁。

呉須釉

陶磁器の青花・染付に用いる藍色の釉薬。

御泊城御用

御泊城とは江戸時代將軍などが外出した際、宿泊した地方の城のこと。その御泊城で用いられたものを指す。

言上写

一般的には記録を口頭ではなく、文書として残したもの。琉球では国王への上申を行い、内容が認められた時に、申立者へ発給された文書。

彩亭

中国皇帝の名代の印「節」が載る輿。

在番

近世の首里王府によって、特定の地域に派遣された常駐官。一般に宮古・八重山に派遣された先島在番、久米島の仲里・具志川間切に派遣された久米島在番、異国船・拔荷(密貿易)対策のため各所に配置された諸浦在番がある。一般的に、在番という場合は先島在番をさすことが多い。

細粒砂岩

水底にたまった砂が固まってできた岩石層。その中で特に硬く固結した部分を沖縄方言で「ニービヌフニ」と呼び、石碑などの材料として使われる。

冊封

中国皇帝が朝貢してきた周辺諸国の君主に官号・爵位などを与えて、名目的な君臣関係を結び、その統治を認めること。

冊封使

中国の明・清代に冊封国の国王を冊封するため、中国皇帝の名代で派遣された使者。冊封使は正使と副使の2名からなり、琉球へは兵士や付き人、技術者など数百人を率いて渡海し、国王を冊封した。滞在期間は4ヶ月から8ヶ月に及んだ。

賛

絵に題して添えられた文章や詩。

棧唐戸

戸や障子の枠を造り、その間に薄い板をはめて造った扉。

三弦匠主取

貞擗奉行所に配置された三線作りの職人を管理する役職。

山号

山号は寺院につける称号。かつて寺院の多くが山の中にあった頃、その山の名を山号とした。後に、平地の寺にもつけられるようになった。

三司官

首里王府の職名及び位階名。国政をつかさどる三人の宰相で、政治の実権を握っていた。

三十三君

高級神女の呼称。三十三君というのは、多数の神女という意味。

三線音楽記譜法

三線の楽譜を書きあらわすための一定の規則。

山巔毛

糸満市にある高台。古くは海上の船が現在位置を測るための日印にもなっていた。糸満ハーレーの当日には、祭祀を司る関係者による神事が行われる場所で、ハーレー舟の出発の旗はここで振り下ろされる。

仕明地

首里王府時代の私有地。

食籠

食物を入れる漆器。

時候

四季の陽気。気候。

柴山

生没年未詳。尚巴志王の冊封使。1425年、明の仁宗の勅諭を奉じて来琉。尚巴志を琉球国中山王に封じた。厳しい琉球への航海を無事にくぐり抜けてきたのは、仏のご加護だと大安禅寺を建立したとされる。

地籍図

土地の所有者などを示した地図。

支体

手足や体。身体。

七堂伽藍

金堂・塔・講堂・鐘楼・経蔵など、寺院の主要な七つの建物。

実学

人間の社会生活に役立つ学問。

地頭代（ジトゥデー）

間切役人の役職のひとつで、間切行政の最高責任者。現在の村長に近い。

指南広義

那覇と中国の福州の間を往来する貢船に供するための書。航海するための指南書。

紙本着色

紙に絵の具によって描かれた作品。

紗

生糸を風透しのよい織物にしたもの。軽くて薄い織物。

尺貫法

長さの単位を尺、容積の単位を升、質量の単位を貫とする日本最古の度量衡。

十開鐘

三線の名器。尚家に伝わる三線の中でも非常に良い三線は「五開鐘」や「十開鐘」と呼ばれていたが、それがどの三線だったのかは文献によって諸説ある。

主屋（ウフヤ）

敷地内の中心となる建物。母屋、母家も同意語。

首里大屋子

琉球国時代の間切役人で、間切や島ごとに設置された役職。

準開鐘

五開鐘や十開鐘に次ぐ、すぐれた真壁型の三線。

詔勅

中国皇帝の意思を表示する文書。

上布1疋

上布とは麻を平織にした織物。その上布の2反を単位として数えるものが疋。よって1疋は上布2反となる。1反は、幅約37cm、長さ約12m50cmで1人分の衣服が作れる。

職制

職務の分担に関する制度。王府に属する士族の身分や指揮監督の系列など、職務上の事柄に関する制度。

辞令書

首里王府の官職に就く際、その官職名や役職名を記して本人に交付する文書。

白密陀

密陀油に白い絵具を加えた塗料。

地割制

耕地やその他の土地の割り替え制度。村落の土地を一定期間、村人に割り当てて使用させ、期間が終了するとあらためて割りあてる。

神祇

天の神と地の神。天神地祇の略。

進貢使

琉球が中国に対して貢物を進貢するため、中国へ派遣した使節。正使には耳目官または正義大夫、副使には正義大夫または長吏があてられた。

船頭主屋

なかんだかり べーせん
仲村渠親雲上が、中国交易の船乗りだったことからつけられた屋号。

人倫

人間。人が行うべき道。人間、社会に関する分野。

瑞雲

めでたい雲。文様として用いられる。

正史

国家が編纂した正式な歴史書。

生子証文

近世期、士族の子どもが生まれたことを報告するときに提出した書類。

青磁盤

浅く平らな形で、食物等を盛るために使用された大皿のこと。京の内跡出土の大型製品としては最も多く、文様や口縁形態も様々であり、数種に分類することができる。

石牆

石を積んだ垣根。石壁。

摂政

首里王府の役職名。国相・王相または諸司代ともいった。王子や按司の中から任命された。王府の中での最高職。

雪堂燕遊草

程順則の漢詩集。中国へ行き、福建と北京を往復した際の出来事や、印象に残った風景、名所旧跡や人々との交遊のことなどを歌った作品を集めたもの。

禅宗式詰組

組物を柱の上と柱と柱の間にも置いて密に配する形式。

撰文

文章を作ることや、その文章のこと。

象嵌

金属の銅や鉄などに文様や文字を刻み、そこに金・銀・鉛などの異なる色の素材をはめこむ加飾技法。はめ込む素材としては陶磁器や彩色した木材や骨片、貝殻なども用いられる。

総地頭

近世の役職名。一つの間切を領する者。

第一尚氏

尚思紹を始祖とし、7代日の尚徳まで64年間(1406～1469年)続いた王統。1429年、二代尚巴志のとき三山を統一した。

大家

その道に特にすぐれた人。工匠。

太祖

王統の始祖の称。

高倉

高床式の穀物を貯蔵する建物。湿気を防ぎ、ネズミ等の害から守るため床を高くしている。

垂木

屋根の板裏などを支えるために、棟から軒にわたす建築材料。

知行制度

首里王府が上族に支配する土地(知行地)を与える制度。

知念間切

現在の南城市知念。間切とは、中世から1907(明治40)年まで長期にわたって続いた沖縄独自の行政区画の単位。

中山世鑑

羽地朝秀が編纂した琉球初の正式な歴史書(208ページ掲載)。

中山世譜

蔡鐸が中心となって編纂がはじまり、『中山世鑑』を漢文に訳し部分的に修正して、1701年に完成した。のちに蔡鐸の子の蔡温が加筆、修正をほどこし、さらに王府系図座によって編纂が継承され、尚泰王までの事績をまとめた(209ページ掲載)。

鳥瞰

高いところから全体を見下ろすこと。

チョウノハナ

斎場御嶽内の三庫理に入って右の垂直に切り立った岩壁のこと。チョウ(頂)とハナ(鼻)のことで、先端を意味している。

勅書

皇帝の命を伝える公文書。

勅諭

皇帝が説き聞かせること。またはそれを文書にしたもの。

沈金

主に漆器の表面に文様を線彫りし、溝の中に漆を摺りこみ金箔や銀箔を密着させて文様を表す技法。

陳情使

中国から4年に一回の進貢を命ぜられたことを、元の二年一貢に戻すよう北京へ陳情に出向いた使節。

君南風

沖縄久米島の最高神女。三十三君の一人。

堆錦

琉球漆器特有の加飾法の一つ。漆にさまざまな顔料を混ぜて彩漆をつくり、金槌で打って適度な硬さの餅(堆錦餅)を作る。さらにこれを薄く延ばして型押しを行い、様々な文様の形を切り取り漆器の表面に貼り付ける技法。

堆錦餅

漆にさまざまな顔料を混ぜて彩漆をつくり、金槌で打った粘土状の漆器加飾の材料。

筒描き

染物の技法のひとつ。筒引きとも呼ばれる。染めを防ぐ糊を円錐形の筒に入れ、筒先から生地に糊を絞り出しながら文様の輪郭を描いた後に、染色する技法。

廷器

王府や国王に直接仕える高度な技能を持っていること。

手箱

身の周りの小道具を入れておく箱。

点彫り

細かな点を彫ること。漆器や金工の技法。

流釉

釉薬を上から柄杓などで流しながら掛ける陶器の加飾技法。

錦

金や銀の糸を使って模様を織り出した厚手の絹織物。

二神将

道教の航海安全の女神、媽祖につかえる2人の鬼神。遠くを見通せる「千里眼」と、あらゆる悪の兆候や悪巧みを聞き分けることできる「順風耳」がいる。

日輪

太陽のこと。文様に用いられる。

布積み

石を四角く切って、一段ごとに高さを揃えてブロック状に積み上げる技法。

野面積み

自然石をそのまま積み上げる技法。

ノロ

地域の神事を執り行った女性。王府から辞令書を受けた者を公儀ノロという。

牌

プラカード。

拝所

神や祖先神がよりつく聖域。地域の人々の祈りをささげる場。

拝領

主君などからものをもらうこと。

箔絵

箔をおいた絵。

箔押

金箔・銀箔などを、器物そのものの表面に押し付けて貼ること。

白沢

中国の想像上の神獣。人語を話し、有徳な王の時代に出現するといわれている。

花菱繫

菱形を連ねた文様。漆器などの文様として用いられる。

羽地朝秀

1617年～1675年。琉球の歴史を代表する政治家。唐名は向象賢。『中山世鑑』を編纂したことで知られる。

破風墓

しまくとぅばで「ファーフウ墓」という。岩壁を掘り込み墓室とし、その前面に構造物を造る墓で、屋根が破風型をしていることから由来する。

羽目

橋の縁に木や石を渡した欄干に張った石や板。

比嘉乗昌

生没年未詳。首里に生まれる。工芸技術者。唐名は「房弘徳」。家譜が現存しないため、詳しい経歴や業績は不明だが、1715年の『球陽』に「房弘徳が、みずから工夫してこれまで沖縄になかった新しい堆錦の加飾法を開発」したとある。

菱

植物の名で、菱形を組合せてさまざまに図案化したもの。

筆頭開鐘

五開鐘の中でも特に優れている名器。

廟

死者を祀る宗教施設。特に一族の祖先や神仏を祀る場所。

平入り

長方形の建物の長辺の面に入りが設けられていること。

平唐破風門

弓を中央が盛り上がる方向で横にしたような曲線の屋根を持ち、弓の形が門の両側面に現れるもの。

平葺き墓

しまくとうばで「ヒラフチバーカ」という。亀甲墓と似ているが、屋根が平板であること、墓の眉が一直線であること、両脇の臼が見られないことが特徴。

閩人三十六姓

14世紀～15世紀にかけて中国福建省福州から琉球に移住してきた人々の総称。久米三十六姓ともいう。

ヒンプン

屋敷の正面の門と主屋の間に設けられたびょうぶ形の塀。一枚岩や石垣、瓦石垣、生垣、竹、板垣などがある。

フール

豚の飼育小屋を兼ねた人の便所。

二手先出組

柱上に肘木と三斗を置いて丸桁を支える組物を出組といい、その出組をもう一手出したもの。

夫役

首里王府時代の租税のひとつ。年貢や上布などの生産物と、労働そのものが租税の夫役に大きく分けられる。

文化層

人々の生活の痕跡が見られる上の層。

墳墓

墓のこと。

親雲上

首里王府時代の士族しやうきゆうの称号の一つ。

鳳凰

古来中国で、麒麟・亀・龍とともに四神として尊ばれた想像上の鳥。

方形赤瓦葺き

四角錐の屋根を赤瓦で葺いた建物。

保元物語

鎌倉時代初期の軍記物語。源為朝を中心
に「保元の乱」のことを記している。

蓬莱島

中国の伝説で、東海中にあつて仙人が住み、不老不死の靈山とされる地。蓬莱山ともいう。

方冊蔵経

朝鮮国王李瑑から贈られた大蔵経の経典。方冊蔵経とは、「たくさんのお経」の意味。弁財天堂に収められた。

坊門

首里城の入口を示す門。

祠

神様や祖先を祭ったところ。

菩提寺

代々の葬式や追善供養などをいとなむ寺。

補訂

書物に記載されていることを補い、誤りを正すこと。

掘込墓

しまくとうばで「フィンチャー墓」という。斜面や崖に横穴を掘り込み厨子甕や木棺を置く墓室がある墓。

本瓦葺き

平瓦と丸瓦を組み合わせて葺いた屋根のこと。

間切

古琉球期から1907(明治40)年まで長期にわたって続いた琉球沖繩独自の行政区画単位。

間切島針図

乾隆検地の測量事業で作製された琉球の各間切の地図。今の地図と比較してもほとんど誤差がない。

曲物

ヒノキや杉などの薄い材を円形に曲げて、底を取り付けた容器。

柾目材

縦にまっすぐに木目が通った木材。

御絵図帳

王府時代における租税のひとつに上布や芭蕉布などがあつた。その布を織る際に見本となつた図柄集。

見込

茶碗や鉢の内面の深いところ。

密陀絵

油に乾燥剤としての密陀層(・酸化鉛)を加えて顔料に混ぜて描いた絵。

ミャーカ墓 (巨石墓)

宮古諸島に分布する石造の墓。類似するものが八重山諸島にもみられる。巨石を組合せて造る。

見上森陵

那覇市首里金城町、玉陵の西南隅にある高台にある、尚門王が密葬された場所。1476年に造営。見揚森とも表記する。

結文

手紙やおみくじを薄く結んだような模様。

棟木

屋根の上部にある、構造材の一つ。

名家

古い歴史を持つ家柄。

メートル法

長さをメートル、質量をキログラムの基本の単位とした十進法の計量単位系。18世紀末にフランスで作られた。

前の家

アサギと同じ離れ座敷のこと。

目地

材料と材料の継ぎ目。

面取型

陶磁器の表面を削って多面体にすること。

屋我ノ口

現在の名護市屋我地域のノ口。

役地

役職にともなうて与えられる知行(領地)。

屋号

しまくとうばでは「ヤンナー」。一族や家族の特徴(家業や家長の身体的特徴など)をもとに家に付けられる称号のこと。日本、ヨーロッパにおいても使用されている例がある。人口の増加により、同地域内で同じ名字を持つ者が増えた際に、家ごとに屋号を付け、個人を判別する材料として使うようになった。

夜光貝

リュウテンサザエ科の大形巻貝。貝殻が美しい光沢を持つため、螺鈿細工の材料として使われる。

諭祭

中国皇帝が使者を遣わして、亡くなった先代の国王を祭ること。琉球では崇元寺で行われた。

謡曲

能の謡。

擁壁

崖などの土留めの壁。

寄木造り

木彫技法のひとつ。仏像の頭や体部を複数の材をつなぎ合わせてつくる技法。

寄棟造り

四つの流れを組み合わせた屋根。大棟の両端から四方に隅棟がおりる形をした屋根。

羅

薄く織った絹の布。

落款

書画を書き終えたあとに、作者が作品の空白の部分に年月日・書(描)いた場所・解題・雅号を記し押印すること。

螺鈿

各種の貝殻を適当な薄さに摺り、平らにしたものを文様に切って漆の面や木地、金属面などにはめ込んだり貼り付けた後、さらに漆を塗って研ぎだす技法。

六諭衍義

中国の教訓書。「孝順父母(父母に孝行せよ)」「尊敬長上(口上の人を尊敬せよ)」「和睦郷里(村里にうちとけよ)」「教訓子弟(子孫を教え導け)」「各案生理(おのおのの生業をうけとめなさい)」「毋作非為(悪いことをするな)」の6つの教えから成る。

琉球国由来記

1713年、首里王府によって編集された。琉球国各地のグスクや御嶽の山来、古くからの行事などについて調べた本。全21巻。

琉球三十六歌仙

沖縄の和歌集『沖縄集』に収録されている歌人36名のこと。

琉球侵攻

1609年に薩摩の島津氏が琉球に攻め込み降伏させた。これによって、これまで琉球国の版図であった奄美諸島は薩摩藩の領上となった。

琉球神道記

1603年～1606年までの3年間那覇に滞在した僧・袋中が記述した、琉球神道に関する最古の文献。全5巻。

龍亭

中国皇帝から国王へ贈る絹織物が載る輿。

稜線

山の峰から峰へと続く線。尾根。

陵墓

国王や王族の墓。

緑釉

陶磁器の表面にかけて光沢を出し、加飾する緑色のガラス質の釉薬。

臨済宗

仏教の真髓は坐禅修道によって自証体得することによってのみ把握されんとする禅宗の中の一宗派。唐の臨済を祖とする。日本へは鎌倉時代に栄西が伝えた。琉球では、歴代国王の信仰が厚かった15～16世紀に多くの寺が建てられた。

連郭式

主郭と二の郭を一直線に並べた造りをした城の形式。

楼閣

高い建物。

路次楽

行列をなすとき、中国から伝来し「ガク」あるいは「ガクブラ」といわれた吹奏楽器で演奏された道中楽。